

4109 地球のかおり：「ポルト有情」（産経新聞）心模様

ポルトガルの首都、リスボンから、北へ、特急列車で3時間。

産業都市「ポルト」がある。

機会が許せば、ぜひ、訪ねたいと夢を抱いていた。

と言うのも、子供の頃、「赤玉ポートワイン」という名前を、耳にしていた。

親父殿が、サイドボードから取り出し、美味しそうに飲んでいた。

いたずらして、赤い顔になったことがある。

話によれば、英国とフランスが、戦争し、交易がなくなり、

英国は、ポルトガルと交易。ポルトの港に、ワインを輸出したらしい。

ポルトガルは、私にとっても、遠くて親しみのある国。

歴史の時間が、大好きだった。1543年、鉄砲伝来。キリスト教、フランシスコ・ザビエル。

「ありがとう」の語源は、ポルトガル語の「オブリガード」

ポルトは、ポルトガルという国名発祥の地でもある。

ドウロ川、右岸が、ポルト、左岸が、ガル。

左岸、ガル側には、ワイン工場やワイン蔵があり、

絵になる、ワインの運搬舟「ラベロー」が、目に飛び込んでくる。

右岸ポルトは、飲食街。

丘の頂きに立つカテドラル、石畳の道や露地、

風情というか、にぎわいに身を置き、

ところかまわず歩き回り、雰囲気を楽しんだものである。

もちろん、ワイン蔵にも。

ポルトガル人は、人情始め素朴な国。比較的安全でもある。

朝駆け夜討ち、ところかまわず歩き回って、

異国情緒を楽しんだものである。

そして、偶然、この視覚の場所に出くわした。

この作品の光景から想像できるように、
茶色の屋根が印象的、いつもの好奇心で、高いところから見ると、
どのように見えるだろう。眼下の光景は、裏切らなかった。
煙と何々は、高いところに上がりたがる。
今の日本は、こんな表現がわからないほど、煙突もないし、風情もなくなりつつある。
歩き回った後だけに、眼下の光景には感動。

通ってきた石畳の道は、あのあたり。食事をしたのは、あの^{あた}り。
市場も訪ねた。素敵な建造物もあった。
澄んだ空。ドウロ川のダークブルー色。ルイス一世橋も見える。
立ち去りがたい、心惹かれる光景。
たかが一枚の作品だが、走馬灯のように思い出される。

リスボンからは、道草をしながら、シントラ、ナザレ、
コインブラ、アベイロ、そして、ポルトへ。
城館や修道院などの昔の建物の基本を生かし、内部を改装した、
国営のホテル、ポウザーダにも、宿泊した後だったので、
私を待っていてくれたような好天気と景観、
この光景には感動。

ポウザーダのレトロな部屋の鍵も、印象的。
時間がゆっくりと流れていく実感、ドウロ川岸の散策、
岸辺に腰を下ろして、ぼんやりと、
旅から得られるものが、私には大きい。
ワインの試飲の時間も持った。最高だった。
いい思い出は、心の財産。